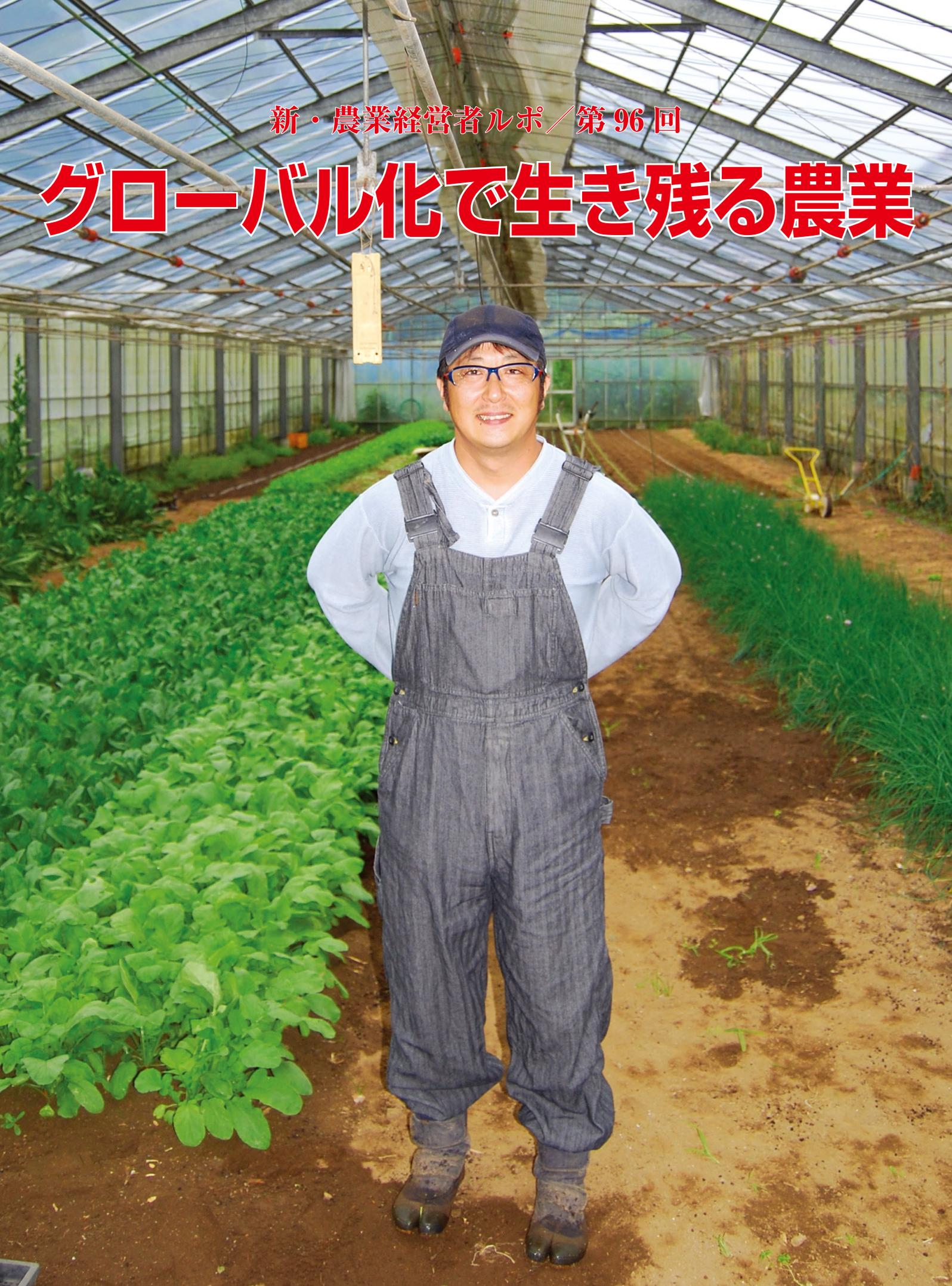


新・農業経営者ルポ / 第96回

グローバル化で生き残る農業



「いずれEUのような経済圏がアジアにも生まれる」。そう確信し、大学卒業と同時にヨーロッパに渡った。1年の農業研修を受け、グローバル化で生き残る農業を肌で感じた。帰国後、120種類もの野菜を生産する長島勝美。彼はいま明確に「日本がTPPに反対するという選択肢はありえない」と断言する。海外を見てきた若い農業経営者が考えるTPP参加後の日本の農業とは？

学生時代からビジネスに携わる

兼業農家に生まれた長島。農業を選んだのは中学3年の進路決定の時だった。もともと植物が好きで、近くの山で採ってきたエビネ蘭や春蘭を自分で鉢に植え替えて育てたりしていた。

「いまでいうオタクかも。好きなことしかやらなかった」

熱中ぶりを見ていた中学校の先生が農業高校への進学を勧めた。

「農業はいいぞといわれて。両親や進学塾の先生は反対しましたが、迷いはなかった」

神奈川県立中央農業高校の草花コースを選択し、組織培養に代表される生物工学(バイオテクノロジー)を学んだ。大学時代には蘭のビジネスで知られる園芸会社にも出入りし、学生の身でありながら仕事をしていた。いまでいうインターンシップだ。「東京ドームなどでおこなわれる蘭展のイベントの企画、運営なんかも

取材・文/青山浩子 撮影/並木訓
していました」

イベント運営の責任者として自ら事業計画を作り、会社の承認を得て、運営にあたった。大学進学後も、大手広告代理店と人間と一緒にイベントをつくりあげていった。

家の近くには港もありヨットのクルーもやっていた。ヨットの所有者である大企業の幹部と顔なじみになり「君は将来どうするの?」と聞かれ「海外を見ておきたい。アメリカかドイツかな」というと「ドイツがいいよ。ヨーロッパの中心だから。私たちがヨーロッパに支社を出すのは西欧にも東欧にも行きやすいデュッセルドルフだよ」

自身もドイツに興味があった。EUが生まれたのは、研修に行く2年前の93年。

「やがてアジアにもこうした経済圏ができるだろうと思った。ドイツは日本とは戦後処理の方法も異なっていたし、90年までは東西に分かれ、異なる経済圏があった。いろんな意

味で日本との違いを知りたいと思った」

大学卒業後、国際農業者交流協会の派遣事業に応募。高校、大学で学んだ花の技術を極めるにはオランダ、デンマークのほうが適していたが、長島はドイツにこだわり、花と野菜の複合経営農家に派遣された。

念願のヨーロッパでの研修

研修に入って10ヶ月後、農場主から「農場経営をやめます」と告げられた。研修終了まで2ヶ月が残っていた。このいさぎよい農場主の決断が長島には衝撃だった。

長島が派遣される前年、農場主だった夫が亡くなり、夫人が後を継いでいた。とって負債があったわけではない。経営は健全だったが利益が出ていなかった。農場の大半を息子に売却し、半分は他の農場主に売却した。

てん末を見ていた長島は、やめたいときに退くことができる農業があるのだと気づいた。日本でこうした農業を見ることはめったにない。高齢になろうが赤字であるのが続けること自体が目標になっている。借金がかさんでも、返済のために続けざるをえない農業。そうした農業とは対局にあった。



長島農園 代表 長島 勝美

神奈川県横須賀市

ながしま・かつみ●1972年生まれ。日本大学農獣医学部農学科卒業後の95年4月から、ドイツ・ミュンヘンで1年間の農業研修を受ける。帰国後、実家の農場を継ぎ、120種類の野菜を栽培し、地元の百貨店、生協、スーパーに6割、残りを東京、横浜および地元のレストランに販売している。経営規模は2.5ha。年間売上額約3,000万円。ドイツ人のフランチスカ夫人との間に二人の子供がいる。労働力は本人、夫人、両親と3人のスタッフ。

「健全な状態で次の世代に引き継ぐ農業。農家でなく、農業者としての姿を見たのです」

実は、農場主から経営断念の話を聞く前から、「この経営はうまくいっていない」と気づいていたという。私はこの話にむしろ驚いた。

最初は言葉もろく通じなかったが、1ヶ月もたつとスタッフと「ここで給料をいくらもらっているの？」という会話が出来るようになった。出荷作業をすれば自然と出荷伝票にも目がいく。情報をたぐり寄せるうちに「これでは経営していけないのでは？」と薄々気づいたという。高校時代から事業にかかわってきた経験が、経営を見る眼を養ったのだろう。

食卓にあげる野菜作りを 経営の基本に

年間120品目の野菜をつくるというほ場は、いずれも山を切り開いて作った小さな畑だ。

もともとはすべて棚田。減反が強化されるにつれ、稲作中心だった長島家も転作に野菜を植えるようになった。自家用からやがて直売所に出荷するようになった。

「食卓にあげる野菜を作り、同じ物を出荷するというスタイル。他人よりもおいしいものを出荷し、そうで

ないものは他から買ったほうがいい。この基本は変わっていません」

自宅前の10アールの畑は「三分分され、キャベツ、ナス、そしてニースかぼちゃが植わっている。ニースかぼちゃはレストランのシェフから頼まれて作るようになったという。

ハウスに入ると、やはり複数の野菜が植わっている。長島は真ん中を通り抜け、片隅に植わっている植物をちぎって差し出す。「肉料理の付け合せに使うスイートマジョラムです」。さらに摘んできたのはセルパチコ。「葉もおいしいけど、花もおいしい。蜜のような味がしますよ」。教えてくれた野菜の名前の半分は初めて聞くものだった。

ドイツから帰国し、すぐに就農した。

「帰国して絶対に作ろうと思った野菜のひとつがこのセルパチコでした」。

それにルッコラ、コーンサラダ（マーシュ）の3種類を近くの百貨店に売り込んだ。「知られていない野菜は」売れませんが」とバイヤーから言われた。それでも自分で食べて美味しいのだからいつか売れると思いい、「1日10個おいてください。売れなければ赤伝（赤字伝票）を切ってください」。

結局、赤伝は一度も切らずにすん



1 東京湾と相模湾とを分ける三浦半島には、低いながらも緑濃い山々が残されている。23長島農園の畑はいつでも山を切り開いて作られている。ここではキャベツ、ナス、ニースかぼちゃなどを栽培している。4現在は西洋野菜が中心だが、もともとは稲作中心だった長島家。原点を忘れないように稲作は自家消費分だけ残している。



5加温機が設置されていないハウス。露地よりも少し早く、通常のハウスより遅く出すことにより商品価値をつける。
6ハウスに入ったところにラディッシュが植えられている。
7シブレット、淡い香りが特徴。8ほうれん草

だ。店が販売に力を入れてくれ、パートも結構買ってくれた。そのうちに鎌倉のセレブたちが固定客になった。

ハウスの片隅で、一見雑草のような植物もすべて商品。「このハーブはりんごのような香りがします」「これはシブレット。和名はエゾアサツキ。西洋料理には欠かせない野菜」。どうやって食べればおいしいか、どんな使い方があるのか…作り手と使い手の両方の立場から話してくれる。レストランのシェフたちが長島農園に足しげく訪れる理由はこのあたりにもあるのだろう。

もちろん、野菜づくりを楽しんでいるだけではない。経営に対する確固たる信念を持っている。

「うちのハウスには他のハウスには必ずあるものがない。何だかわかりますか」——。質問する側の私が逆に質問された。辛うじて「暖房機がないですね」と答えた。すかさず今度は私が「でも加温をしない分、生育が遅れ、出荷時期を逃すのでは？」と聞くと、長島は「ふふふ」。「コスト面だけでも無加温のほうがいい。でもそれだけじゃない。誰みかにも加温するから、促成や抑制が珍しくも何ともなくなり、結果は価格を下げてしまった。私はそういうことはしない。このハウスは露地

よりも少し早く出す。加温ハウスよりは遅く出すという位置づけです。このすき間がもうかりますから。私の基本は、環境に負荷を与えない農業、そして旬のものを旬の時に出すというやり方です」

今年の春に植えた玉ネギがとう立ちして、玉が大きくならなかった。「でも葉の部分はおいしいので、今シーズン初のタマネギという意味で『タマネギスーヴォー』としてレストランに出荷したら好評でした。大事にしているのは商品化率をあげることに。畑に植えた野菜の90%は商品になっています。おかげで利益率はいいですよ」——。

何を聞いてもよどみなく答える。それだけ頭の中で整理されている証拠だ。

少ない農業者が農業を支えるドイツ

ドイツの話に戻ろう。突然の廃業宣言によって、その農場での研修は10ヶ月で終了となった。だが、ドイツに行かなければ経験できないことがあった。マイスター制度にふれたこともひとつだ。

ドイツでは一定の職務経験や専門の教育を修めた人に「マイスター」の称号が国家から与えられる。マイスターになるための専門の大学もあ

る。しかし学校の授業だけではなく職業の現場と常に連携し、現場の問題を吸い上げ、大学で解決策を探り、再び現場に還元するという連携がしっかりと組まれているようだ。

農業の場合、農場主自らがマイスターの資格を持つ場合もあれば、マイスターを雇う場合もある。長島が研修を受けた農場は後者だった。マイスターを雇う農場には税制面や研修生の受け入れ時に優遇されるなどメリットがある。

私は、マイスターとは秀でた職人技を持つ人に与えられる資格だと思っていたが、長島から「後継者育成こそマイスターの使命」だと教わった。長島もマイスターから農産物をどうやって売ればいいか、スタッフがやりがいを感じながら働いてもらうにはどういう組織を作ればいいのかなど指導を受けた。

ドイツと日本の農業を比べると、国土面積は日本の94%でほぼ一緒だ。しかし、農家人口は34万戸（2007年）で日本（総農家で253万戸）の7分の1しかない。だからといってドイツの農業が衰退しているわけではない。経営能力を身につけ、後継者を育てるマイスターが産業としての農業をけん引している。そして、ポーランドやハンガリーといった国から来た人間が

働き手となって労働力を供給している。

EUは移民も多く受け入れ、労働市場は広く開かれている。だからといって本国人の仕事はすべて奪われてしまうのかといえばそんなことはなく、競合しあいながらお互いに住み分けしている。それが経済発展をもたらしてきた。

TPPは農業に新風を起す

国境を超え一大経済圏を構築し、互いに協調しつつもせめぎあう関係でもあるEU諸国。こうした環境に身をおいてきた長島にはグローバル化は当たり前なのだろう。「日本がTPPに反対する」という選択肢はありえない」ときっぱりいう。

「TPPへの参加によって日本の農業が失うものはあるでしょう。だが何もせずに失うものの方が大きい。日本の農業がスタート地点に戻り、新たな仕組みを作るにはTPPがきっかけになる」――。

長島の考え方はこうだ。成長産業になりうるはずの農業の足かせとなつていゝものはなんといいっても農家の高齢化。「60〜80歳が太宗を占めている農業は産業とはいえない」といって世代交代も進まず、新規参入を阻むなど変わることを恐れてい

る。自助努力での変化が不可能ならば、TPPをきっかけに構造を変えていくしかない。

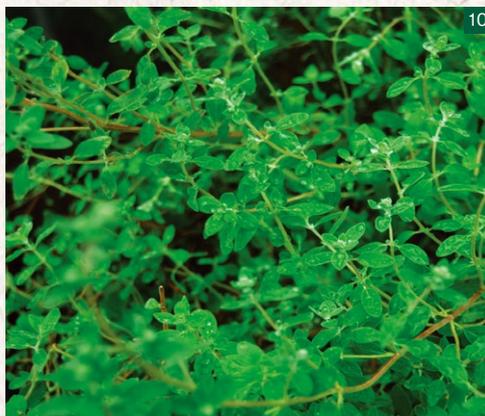
TPPに参加すれば、せめぎあいに耐え切れない農家は淘汰され、意欲のある農業経営者が残ると考えている。TPPによってモノが安価で入ってくることに、「人や考え方が入ってくることに意味がある」ともいう。

「たとえば、外資系企業の農業参入などもそう。デルモンテのような多国籍企業は、産地を組織化し、グローバル規模で農産物を流通させる仕組みをすでに持っている。こういう仕組みが日本の農業に自由に入ってくれば、農業経営者も出荷先の選択肢が増える。それだけでなく、これらの企業の戦略を活用し、アジアへの輸出戦略も組みやすい」

TPPでは 国の農業はつぶれない

長島のいうとおり、TPPに参加すれば、確実に農業に大変化をもたらすだろう。だがTPPが日本の経済や国民に恩恵をもたらすだろうか？ 私には正直なところ判断ができない。仮に恩恵があるとしても大企業に限られるだろう。気に食わないのは、まだ参加すると決めてもいないのに米国から自動車や牛肉などの

9 水菜 10 スイートマジュラム。上品な甘みのある落ちつけとして、肉料理の香りづけに多用される。



規制緩和を求めてきた点だ。それを承知で交渉に加わるなど個人的に癪に障る。

また、構造改革というものは政策によっても、外庄によっても動きにくいのではないかと気もする。当事者である農家が「やめよう」と判断し、一方で「それなら始めよう」という人が現れ、徐々に世代交代や農地集約が進むしかないのでは？とも思う。

しかし、長島の話聞きながら共感するところもあった。そのひとつが「農業者も変わる必要がある。だがそれだけではなく、日本の食文化を守り、原風景である農村を守っていく覚悟を国民が持っているかどうかも問われている」という一言だ。

「TPPで国の農業がつぶれることはない。EUを見ればわかります」（長島）。確かにグローバル化によってヨーロッパの農業、食文化、伝統が崩壊してしまったかというところとは異なる。

「アフリカなどからの農産物輸入が増え、競争は激化しているが、一方でヨーロッパの人は自分たちの食文化を大事に守っている。それどころか食文化や食品は日本を始め各国に輸出され、各国で根付いている。グローバル化によって失われたものはない」

では、同じように日本人にも農業から始まる食文化や伝統を守ろうという国民性が備わっているか。「TPPによって本当に農業がつかれそうな事態になれば、農業を守ろうとする善意が働くのではないのでしょうか。そうしたものが機能せず、国民が農業を棄てるとなればそれはこわいことです」

「確かに、首都圏に人口の半分、6000万人がひしめきあうような国はほかにない。しかもこの人たちは食べるものを何も作っておらず、農業を棄ててきた人ばかり。国民である限り、必ず一定期間は農業に就くという農役みたいなものがあった方がいい」。

「農業にも変化を求められるが、国民も変化を受け止める覚悟が必要」という長島の言葉が印象に残る。一方だけに偏らないバランスのよさを感じた。

取材前、私は「TPP賛成派」としての長島をどうとりあげ、彼の考えをどう伝えるかばかり考えていた。それは愚かなことだと気づいた。肝心なことはこれからの日本の農業をどうすべきかを考えることだ。長島はこの点に対し明確な意見を持つている。長島と異なる考えを持つ人もいるだろう。それはそれで議論を深めていけばいい。

消費税増税案が浮上するや否や、TPPの議論は急速に後退した。6月5日の改造内閣でも、TPP反対派である郡司彰氏を農相に任命するあたり、TPPへの政府の姿勢は腰砕けという感じもする。だが、こういう時こそ農業界ではTPPの議論を深めていくべきだ。TPPが話題にならなくなったら反対運動も下火、議論も尻すぼみになるようではそれこそ農業の衰退につながる。長島の意見をもとに議論をより深める場づくりを農業界自らがつくり、答えを出していく必要がある。

(本文中敬称略)



11 出荷に使用するダンボールは無料で仕入れる。ダンボール代を浮かすだけでも大きなコスト削減となる。
12 百貨店やレストランに出荷する。畑に植えた野菜の90%は商品にするという。
13 ピッコロ人参は銀座の高級レストランに納品される。